隨所師說

へ4
4406

4
4406

島田藏書

帝國圖書館藏

4406

隨處師說卷上

倭中人ゝ橋正浣詠哥おくの書なるゆへ又
点かゝりしものゆゑ哥をそれぞれ
とりも侍るゆゑつとゝ書侍るゝ又いまれさるゆゑも
侍る故と哥ゝ又それゞ侍りしてさらに
うしあるものゆゑも侍るゝ只大やうの詞を今おもしのみ
こゝろむるとおりし侍りとゝ哥ゝ人のみかゝあ
られゆゑ所をそれ侍るゝ巧む言侍るては
よき哥をおきりのゆゑ也とゝ事を侍るけれのゆゑみ
侍るゝ〻さても古人のよき哥のよき法ゝく巧ゝ氣
ゆゑ侍ゆゑは祇しなりと思ひ歌きを人丸を巧ゝを
まゆうまひんとゝ中人も侍りそれいまゝ哥のゆゑを

しるべ作りたるいとなく和代に巧をまぬれば巧をまぬれば
叶ふ〳〵天巧と人巧とえんをき作るぬべてをの〳〵
遅き論なる〳〵却て天巧といふ言遠みとる言
と言ゆんゆんゑ文ぬ巧を書るしに巧を新るぬ所や
りて天巧なりあ〳〵いと人と作るぬとりつくろひ云る
んつくひ〳〵ぬんと巧なく却也ものしに巧はせぬる
と何をるあくれりうるをく〳〵やえ作るうまくなきう
よきを論をく作るせされんあひの友をば言も
中ぬ作りさしぬ饒るをのうるに〳〵みい所謂四方ぬ
使〳〵を對するを東帯〳〵賓客と作る方さは
の海ぬて人ぬ歌のよ中ぬはあ〳〵しさは
なりて〳〵作り忘〳〵きすの也思無邪のうるれい

せかく〳〵ひすと作けいとは誰も言ひぬる中也と特
〳〵やるを皆中とに作れと詠句は中ぬもり
つるぬを作りさるりと思ひとはるとやて歌の上
ぬはるつさるんおのれきつ日出別義の特宮ひを
をて〳〵書くを〳〵ぬるぬ作りるつを物て年
すを〳〵きんおるく書なく作りかくをとくしく
中作れておのれとえのるぬ漢ひ思中云をを也
見いりの中八章文もるぬく言ひく作りを作るぬ
はるおれいせされと章文もおのれも作て言ぬよも
こをるをりあんをぬ作れといふをを云〳〵きせ
志〳〵問文也〳〵此ろ古今ぬをきよ作り
作りそれのさい樂古也志〳〵古人の言をるれ

むかしやうて宮さはかたうゐ侍て又古今のおりつき
をひすりも侍へいや城寺きの幸みすらし講案あるく
大きに言えみることゝ侍るせ
世人のはゝをひいをえんはみるとゝ思へすり遠行こゝみ
ゝえ侍り又えのりとも元えぬを伺の益ら侍んをもて
いはゝ又すとも元はのゝんいとりも世さんたをはのゝ
人と云て一いまさ宮ゝ侍ゝ世ゝ侍ゝ世ゝ侍ゝ
指のむをよくえのりとも又みるえうい己らりのみあに
すゝんるこゝを深くゝも指えのんいこらりのせされい
花景をいゝことをやめてまをかくまおりひうきま
ゝみ侍り又を長をもぬるゝきに侍れと又みるを
己ゝと思ひあやまるう多く侍まは又すもるみてかに

侍りさる仕方い名と利ゝに好をうまに以に徐をお
立ゝに侍るゝ一徐を第物の碁本み侍まはおうら
宮のゝゝ益をすゝゝとゝ侍るゝきれいけた乃
いさをい古人も温柔敦厚うと中侍うゝ人ゝも
化する半み侍ゝうゝたゝ奇ゝみいてゝ侍みう武
実を失ひ武を争ひるとゝ志ゝゝ又ゝ予する訪み侍り
武きを道みすり妬心をいみきことくゝしき争ひみ
もるゝと道の麗せゝゝ以ゝ武ゝ只見みは
を得みりゝとゝひりみりゝるゝ以ゝ
侍ゝも出ゝゝりまりせゝゝ書流一侍り新字いゝ又ゝ
中侍ゝくゝくゝみいめ以はを侍侍るのゝあ行こく

二月十九日

うき村

高橋令兄に

信濃人弼の旅客の要を書付る

世の中に人ごとの業をしらしめ事ゆるものも
道理有て好調者と見聞たるあやまりも世にあり
八化の年みをき誤りなくはれいくに繁りあり
さてそこの序歌さく事ゆるのみして調に志を
可似ゆり歌といへども調なくして字にかゝはる
歌を歌の精微なるものも歌の言より調あくて
詩といふ字をいつくみあんちまとこはそこの三九誤
なる人天の下乃誤りられ罪すべし一のひさぶさい
考へ歌と即心即仏なる一うんてもおき事也只志と
しらさるとみなのゝ古今集をのゝ見まへ卿令得の人

ある一古人も好聴遠鏡なるとの沒を見ます〳〵
お里はあやまちなる〳〵文を見ます〳〵おるしくも
古人なる見歌に実相りむるひく今の言葉あて今の
字調あてすみなる人一一ゆひ歌に伝ふ水のとる
こゝ歌一とゝてを切なる見えむるあれこと
おなしく旅州和文の奥り
文章をゆる義現れるゆゝ方てもゆ
も文まとゆぬる上も也古今の序を作り記ると見ます
いつくり方えさ歌中ゆ方なるき字あるは時代のから
ゆて今の云歌ゆあゝさ歌所也こゝゆ古の俗云れいち
世の引をて卑俗ますて方知一とをきころ多歌
ゆりとりふ字起ゆる人の方えゆ詞をつふことをを

ゑ〳〵きて知ふつき事
を世のゑとをめしさ
云るれいせはせ〳〵つり
の欲をりをよりめて犯
徒ゐ何まも文より雖き
悔ゐ絶まいせをいるみと
つゐすりて也文句ハ古今都鄙すをくゆ月ゐ
変りゆくものるれいゐのみゐ化すの也世間のゑ古今
を貫徹するの具ゐく聊も遠きるす只大和さゐゑ
すゑ唐も蝦夷もかるゑぬるのせされいけゑ云ゐを
捨て形をるきことに付り和を詞いるるすのをを云ゐ
常にいひあつりふ事歌も詞ゐ詞ゐゐひゐるを

ゆゑハ平仮を続雖るゑ〳〵き弱ハけ字仮ゐゑのゑ奇を
字仮のゐゐ形ををゐのゐゐをゐをゐをとする也仮ゐ
をの切有〳〵ゑさてを字仮をゐるゑ字ゐるとすゑに
智ひ性をるりをゐのやすく成就をを一時ゐ思ゐる
強せをゐんや世をんの真心るを字ををまいゑゑ続く
ゑゑやをゐをゑゑゑいゐ何ゐて悔んを云ゐ名利ゐををる
はるりをやきをるをれを世名利のかをり拘一朝夕ゐ
やをゑをきゑ意のやゑをををををぬゐをひゐ迷ひ
こハ己業ゑををんゐてをゐゐやらゐ思きるゑ祈さて
かの誠ゐを妨るゑのるゑハ約ぬなるにやらゐゑきをゐん
けさゑひをゐかを〳〵付て字月ゐゐゐ試を付ゑハ千載
の上ゐ及ひゐ裁の下ゐ耻る欲もいゐて出来ゑん一ゐ

ひかゝ[illegible]を信ひ仕てをかゝみ[illegible]さん事をのゝ[illegible]
仕るのゝとかゝ実拙実景みむひくさゝくよみ
出すれすきとゝ[illegible]を仕るゝ所み冊中ゝかゝ[illegible]仕
也宗賢

伊丹人大塚知元の歌に

その世みゝよゝて元あつゝをゝに用むみ[illegible]
仮初のおさけを云もさゝみて遊ゝこのゝり収ひの字を
りゝみも大ゝさい古き例みより雅ひゆる伺みおつみゝ詠
のんゝを美ゝるんおゝ[illegible]かく源の拙句をおきひさ
その末をせきゝ[illegible]ゝ渡ゝとゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の
よゝ[illegible]ちるんする[illegible]たゝりのゝ[illegible]みゝ拙ゝ[illegible]
をゝをねゝるまみゝ[illegible]おわ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の

流きめきて狐川人[illegible]ゝ[illegible]流測のやゝみも彩ひなゝ
ゝみゝるんされと名利の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]は
いゝて大ゝ[illegible]の漂みも[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]大塚の
尼君の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
めゝの忘ひ川あゝぬ[illegible]みあ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の
罪をゝひゝゝゝちゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]尼君
のあゝゝ歌ひ武いゝあゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]んのゝゝゝちゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
出ぬゝ[illegible]ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

みなもとのむねとうついかるとこんゐ（ばうとうあ）に
かくそういつをばうしも也あれしこうやさまひて
この系れたるいうるために拾ひ集めるものを屯倉
雑波人何ぞ歌のおくめ
ふみおりはちんやはみいてこんやおりみとりさつくし
やむことあさくんやきそふ拾みきいてちりつくを
つき道をしおすひなきこいひ勢るすして水欲
きすゝ社あやーきれ天地ゆくまれ生るまを人家
のるつきたみあるに冠をいやき位みをんの人のをたに
つき事とおりひあやまをもせみかうに伝れいおの礼
常樹一人ゑゝを式そ天物あるを馬天連（テンレン）とそうあり
あいゝをん君きたるあきんををひ清のてき酒のるく

浦ひこのたゝむたれいこうひ拾（おくも）ゝ記ゆそうし
文化七年の日記のうち正月の所
三日久さうつゝ酌（ヨサナキ）ものゝやきゆれい稚を抱きて堤
ゆすりゆてゆのうをを人ゆに羅のむ井のよみあゆこ
あしの山く白ひうに横ゆまうるうちに夕雲白
白れひれさかきれぬ雲の色雲深なるみうすき
かゝを紫の白ひもあるるゆをきゝ大猪の小猪
るゝゝるりあるあるる獣の影かゝもゝ式いるの家
さはうと一さうゝ伝ゝ忽ち人の影とりあるを鬼
の影と消失ゝるゝ ちゝみうゝゆゝい彼幻の鬼を
すゝ名付あゝ海ものゝをいゝとりあを

雅経卿の花の似のうらを書ておのれ家に
すきこれの書そはみきるれとおあけくさてかくはの
彼方のせこいはをさしれ鶯きて鳴いはこのやとよ新
つき御人はのりをそれ又いそくそこれけしすむ
古今集の序のみ人まものみつをくいひきるせと
あるそこの方すむよをいつせ程ふみいとい雪ら
尼れいう紙をるせこい雪谷のおもしろれうるみ雪れい
せおのれかめのくをちうの世とよあい
みはとるの場のすきい時のこるさちすはあな
死きこのをを尼くおのれくもをつとええみをれ
といくかるのみつきくいれさことをとりを
雅実を立みきれて雅実はいみとこはあ午み

つれのうせをうを立みきれといくえ雪を流すう見
えて新るとはしを業をせをつ年のひより月り
花のつをくを奇すあとをいつを何をの方をよまんとみ
百人一首三十六人の古歌るををみ出こせとおつ
うう新おのとをよれもせをしまとをくを得紙
くを人のよあるを方をかくいるみ雪えををるとて
をしせきをしのおのいつを通みよりくはをしのみて
言はのうせを立つをそつみ歌をよ名みはをもと
いよ通みをくつをのせ只月をいもをいるをいをを
ろくいをもん得きんをさてつきくみ立をを雪み
かをうをるをいよみみをしをんをいをんみく
ををみ奇れのるくしを文書の場紙み様の為て紙みを

いふところめくいつくる味ありやさ法こそとりふへかん
といへは夜の落末こそ床ゆかしを今よむ也と答ふ
然らハおのか句とするれハ手柄まし侍らるあらてハ雅き
か上にもしるしん詮もなけれハのか人かといひふへき
いふぬ俳とハさまよてるしとおもふ付合書の為ハさもあり
つきらく発句するまゝぬかつ俳諧まよして世のうちとのあや
まちを師おもひ定めしかも侍れハ又児女人の為ぬ
もしくたくましくきいつくのことを云なるかたに觸り
てゆるりせぬみえることなれ
周翁林宣義か申しく
そこ此家教をハゆふときものとしこさてそのへんの花を手
みのくにすゑ人のよしをし侍しかての都のまつをちりつをそみて

教をたつるといふハおのかきん言ん定侍る是をたとへはすなは梅の
林をたてこそしあ垂くはてより此の本の総みのこ枝よりなし
あらぬ梅か香橘の匂ひ名にすこえ桃の枝をはなたひ
らきとよめるのこしをいふてらつらをこころといひん梅津の里
人橘の袷きとてそいひらん然てそのえ好かみえり侍れハ
ならひこすら彼か名をものえんのまハみとも人の園ふ
なくして月の桂や隣なりとも志らんにあかる光ぬ
匂ひもてつひみそのちるしえをはつめやハすしおもひへ
はいりなて彼林ぬは入りてぬすとも一き里をへたてられ
すハ匂ひハ袖か余るへし匂ひへは家のなり八園乃
まきれの一枝ハなとらすともはてなるん何ものたしもあり
とのこ形るいそんや詠ハその匂ひをのこしちるなる

をや

七月七日ありさくみまつりすぶついてみ一えりらいに
さへ侍るもいとかしこし　　京樹

のふよ君へ

伝法人弼の御の奥み

其比風雅人大きに歌みを為入津の歌きこそ人等を
一巻に書み侍りしに歌ハ侍りて彩みの似ありとりやも
うハ水火共遠に侍るものの也世ふけい論もく作れハ
筆みや侍りしさ此方みの歌師のすくこすもむい絶さき
ゆう歌人の狂言よくするもおき也それハとすり言代
乃み志をものハ狂言みハへうしに狂言みんあるものハうみ
すも弱みはさうはさそれも狂言のくあん里るハ

歌ある津をはしりもやしりもむうり世に
おこたりそれ侍るを葉で狂みハうりおきに
ゆうさうしと云一ゆうそもさるもんやすそ侍る
其腸杉みものやさうに勝むみるしさを宇狂みハ
入ハハるのの不得ものるうまみ歌とのす津おるに
り也道ハ誣ハるしみ侍るまさ定郷みていハ考樹
さて不絶ゆを侍るに出来さき歌泉ゆうりみ
侍れともさるそ都みもさるをへくも見え侍るゆ
そはは都鄙みかるそるおみ侍るに見ハ言の上みを下み
みもよるしに又漢ふ出ハ誣の志のくみて
侍るを射るゆりみ乃やすき津とそひ侍りさに
言をよくよみ侍るくハ侍るハみりハありし

されて云ふ事ハあまりこゝえ付れてうを樹うゆすき云と
中ハ京得うめ〜こゝえ付りこゝてえ雅さにあらんむふ
所のあり つるのこ宮み勝下の芳重み付りかの流系の
大舎ちんよく付こゝて又一人勝下をきてうんも遊こ
あ〜んみ相むく世たみ師うき事ちも知むふ風し
只んおうきを祈り付りそてもいきハかくいき付ハ
ゑれハ其限りかつらひむ〜生庵の樂地をえ又歌
ふれ〜てみ歳ふ打の春よこゝ〜みとこゝ俳諧と
中りのハ狂歌のあくひみハ付〜ぬ世この志流を引入
くよりこゝをこゝ〜弘こゝあ〜ちの芭蕉う歌
ハ貴之明恒うよみハ〜そ出〜うたこゝハ〜ハ〜む
つ〜〜〜貴之別恒み狂歌事をうけ古くのあるる

奇よく〜よみ出〜ハ〜ハ〜ちよみ餘りあみ歌すや
こハこゝうを云のこゝをこゝあるまそもをくおのうハ俳
諧ゑてきハ流みをきを知うさるを〜世ちく芭蕉と
り人誹人猿丸ち夫の奥山の歌を人み示こゝ弘ハうく
おりろこゝぬ只まのうの也こゝく風味あんこゝそ
ま〜世是今の世の弘人の乃ゑ所みあ〜ハ世の草
見と云へ〜〜奇といハ雅ひゆ〜のこ〜こゝみりみ
ゑるつやこゝの知る所み付〜ぬ世ち味ひ和きる味な
る事 茶水のこゝきを〜〜こゝハみ〜ちみうさゝの
奇人とうる人こゝ〜世芭蕉みて〜も芦村みて〜も一枝くせ
付〜ハこゝを〜むこゝみ付りかくいハ狂歌をこゝり
こゝき付りしみつきて俳をもおる〜こゝひむりんこゝと聊

かゝる所を序み奉り侍るのみ

信濃國松本藩鄙元命の歌のおくに

とく〳〵吳服の二和侍り品すゝくと侍ひなるうす吳
服のゝときらゝかといひて又多倍代あゝさきあるを
き給するやうるもたゝけるを弱ハをされとれ
古人のいへるそ者心をへの中也けりとて初めきた
る志ハをんをなるゝ也初きを祭ゝ真心をの
をりゝとるまゝおゝまをのゝとも也さ有るまゝ
まゝいりみ学ゝと云ゝ品一篇み歌衣実を述るのゝ
詠実をのゝ所例初きんみけゝるりゝ品さとをれ
めゝいやゝ者て孫詠をを形る業也在に〳〵初な
名ゝいかゝき中也歌みをりゝ〳〵きゝゆれ中侍也

ゝと初れとゝいゝを後恵法師の御也ゝ所侍る所
品みゝゝまてはゝいる人みゝ弱のんゝ初きりの也を
云〳〵初分れゝは下知すゝ下人あゝゝかの似すゝみ
為めゝかれの間を拾ゝゝる〳〵きゝ也品ゝをのゝゝ
りみてみれる也ゝゝみせんゝも初くをんゝもゝをゝよ
き也常の云詠みさゝるゝつゝひなきをゝて初面〳〵
拾ゝ〳〵みてもいゝかきゝ〳〵をなゝゝ〳〵きの
ゝくみゝゝ乱ゝ〳〵の〳〵の繁たみ侍ゝ也
言みゝ師分ゝゝ中ゝをゝき世まてゝゝみおき中み侍き
品すきゝゝみ侍ゝのゝゝをゝのゝゝを云葉すゝく
りゝみ何の学ゝゝゝる侍ゝんあれ〳〵こ

同出矢俗保恭の詠艸み

朱もて書入しハ奥本ニ与校合せし以下同し

今かし心を用ひおいて終に開悟の附侍りてし開悟と
いへるとて禅家のさとりのごとく静心して結ひ侍れ
只よみもくるしかとみ字云てもとつみなり侍のも也常
に詞の部いへるすえんといへるすえ侍んるを常にをは
用ひ侍り給と終日の読みしとも（遠）ひなくむつかしき
説語み天尓波の相ひ侍しぬハ古事をあり云事をおきと
いへるも也彼（平）言中みても聊偽欺の言侍れいあちまち詞志と
ろみて人の心あみすさなるも也是誠実をなすやいれ
天尓をも波も調もあいさるともあるいさるもの也寄人の天尓
を波しるへの故るもあれおのれを歌き人み衛の作り
なる事を知るへし歌の調の正の為ハ実地み入ら
さる式はつのこ今みても小児の詠みは調の部れなるを

見侍れこそ能ハ名利の心をはなれてさるゝ故也其の実地み
さへ入侍らハおのつからかさなる如く巧ある如き佳境み
至る侍るへし　世の中の天地の風光ハ見はかりのことは
侍りきやそのゝちや何れもして
高橋正澄か詠草のおくみ
去年あゆりすりハ詞は上達み於ては調出清の事と欲は
緻みは家ゝしはへもこのゝへ日のなかさ極みハ詠出事上みは
おのれそ只生んなりとも思ひとるもち只今ハ古事小は作
鳥を切し譬をおもひしらは難をもとは中侍るぬるり
おるしくまれなく心ゆるさぬ心をもまて了み侍る譬をとらしと
いひてもよるきはよるき也しさらひ見ゆる事　肝要ハ
多くいへハ真測りよるきハ即ちよある也其之のよあるハ

即ちはるき也とらを後に見知へき事也かゝる所のすをを
くゝのゝゝ切へき事こはさるのゝ所に詠を云るのゝあれ
ゝこ

まこ同しくへ

見記の詠ふれあるゝ所に作り文中にあるゝしれて通て
ゝへき限みもあゝ抜ハ初おき作りはかゝ第面の後を作り
大なるとゝやさハかされるゝのゝ当てんゝや中作ゝ人みゝん
方さんのゝを称ゝ情のゆくまゝふなゝ通ゝ見玉ハゝは
事世あゝハあておのゝゝ文言文脈ゝのひ作ゝ添流
拙を弥るゝとみゝるゝあゝぬ事也影詠をゝるゝのハあれ
ゝ実元作りゝ後実第実事ゝ抜ハるゝと中かゝ作れと
きゝへきみ世に題詠ハ影詠の実情いゝてなゝん影詠実第

のゝてくあれゝ云みは非に影詠みゝゝ所あれハ書事見記
ゝゝにあゝ伝ゝをゝるき実事をゝ見ゝ見作ゝ抜的論
ハ者ゝ雖ゝとくゝ出歌眸なき像のゝ地ゝ作り歌し
文も古歌古文を称ゝ古歌を歌ゝの文と書ゝ見ゝ見ゝ古歌
古文み世ゝりの出来ぬゝゝされゝき古文古歌ゝ世ゝを歌
みはあゝに世古奇を観ゝゝ奇をゝゝて同ゝ作るみゝゝ
歌ゝより古の海をゝるの字ひ作ゝ也ゝゝみゝもゝて八已達の
高評も称あやまれゝゝなきゝ作ゝ抜ハゝ論へくゝ
ゝゝハくゝ作ゝのゝゝはのゝう一唱中入作ゝハ永のゝくく
ゝをゝ作ゝゝゝと云えゝ作り

伊中国塚村直の詠なに

依働増恵

ゝゝきに吟詠きゝゝ多ゝれゝあやゝゝ人の立ゝりやり

こそ拙なく人うき所とかく弱世のきうとしてハ
流俗のうしなひけり遠ひゆ世ようり離きみや社友のれとう
うへ行りこは流のもうすくえ学ようなるせられハ
古歌みけるうしかりをとこ行れたる一つみても古ハ体実り
して今ハ虚流なるをとうるを社友云ハとを称る所
みて行るのハ初人みてをえ元人のうへ行れ人うへ世ハ潜み考
るみはるみさみはなし今日の趣接(オウセツ)の流のてくそふまを
述くハ其用をなんとのうるハいるて見ハうの事
めうひはるん只俗飾(ゾクシヨク)てし人の耳目み衒ハ所有友を
一ハ其衒ハ名利るり論ハ歌一首をうのようにとり一
名利をうそんやも云へ一者ふを行れりと名利の山ハる
入初一りのみはれハ一のひは清歌をなて拙てうる方の言ハ

拙なりはそうひるりはれて年ハさるる名利の渕合ハて
流くはれハ三つ見ハて彼ふりまてハえのれもあを行
るせ一のひ彼流谷中と離ふはりてめもうハ世
されハ児童の歌み流俗の諧をあを見年はるうり
ハなえぬしはるうハ一もるより弱ハ調のうみて辞理ハ弟二
義せいるるものこと見ハうおき事を云ハきるて
辞理の俗りはとい主事をれ一品調をそふ調ハ
面俗(ビンゾク)ろ拙てをうりせきうるる面逢里みてをを追ハば
ホうといひ大を追ハシイとりうを見を多世不易のうと
云多をおひ大を追ハみんニつをきれハせホうシイの調ハ天下
遠ふてをなきをうらハ人を為りをまのうとノううハ
いうてるるうんにうを見ハ古俗今東さハりの天年を後

の連ひてを写し

又

けのひの孫子大きに成りて行くゝ歌ひ行く儀を
拾て筋をかゝに弱き行しせけるみてを一言きうみ
誠にまの〳〵は詠ふ歌中所行
さゝいとこゝろのうちみいひ〳〵をのゝ筋有〳〵ときゝ
の古昔人益をそ行ふ也煩悩即菩提ゆ行ふ下地の儀
を拾ふ所のゝのゝ歌すみあんん下地のあの意所
也みゝ〳〵い客世中ゆ身ゆ行ふ也のあをとりちしゝ
物〳〵き客ゆと有へき所ゆ行をい拾ふ法中ゆ
きくゝ考也拾ふの所代ふ也ふてなくてけをゆ
をゝ行ふ也誠の山踏きゝ下ゝきゝ下ゝんてハ

山口ゆ出新かの名利の山深麓の谷いんの也入ゆ行れて
尺ゝきゆを捉ゆて踏海をきゝんに一時ゆ出離せゝ
ゝれい心頭一顧のさゝひみて何事行ふんゝを踏破を
ゝてハ世の謝人物所漢みし侮ゝる〳〵況や二人君ゝ
のゝゝゝ旅てゝやゝ口をゝき事ゆ行ふあれて
けゝ石そいとゝく形ゝ行ふゝの里代僧水月ゝ節ゝに
ぬけとそ〳〵と中和ふんゝを決一ゆ行ふゝゝゝハ紀ゆ
え行ふ法の歌し方えぬゆは行ふんゝ只ゝの調みゝもき
行ふ也ゝゝく〳〵い書入雖〳〵中所行ふ又筆みていゝぬ
ゆ場ゝゝゆゝひもも来行ふれいゝちゝゝゝきてやゝぬ和ゝ
を只添削をのゝ事ゝて必歌ハあゝゝものゆ行ふれ名利を

離れたる心楽の地を定めのこゝに侍り給へしくはさは
えらく雲にや侍らん只にゆみゆくまゝしまひさに盤
なるらんには疑ひし
まん女を松の一木そ持ちてなん植ゑて神名の号を
さる月二十七日の夜なりけん
元親か飛に答へける
こゝあまりの攝恵の説なりきや此は飛驒の守元かたき人彼施に
とひ侍ものいふ世にいふ俗説のことく考樹十年前三十六人集
に富の家に書付られ侍し歌をとれにぞ書し頃の写に
歌にしんこゝあまりにすて祈るてらなるく呪はせんきこと祀る
此端詞にかゝりの条の中の目にあれりしてあり是によりて考
ふるにあれとは寺院にて御手の祭といひし俗にせんの縁と

いふときものにて流人ありしたてそれゆき帰りに歌をなして
なりけりやうの称す西行の歌にも折りにことにあれの神ぞ
ある歌のうたのはすそよしるらんとおほ〳〵ておし御言えるあり
御祖の神別雷命をうかまし給ふるんを祝ひて御と云へき
これにあれるとすみなるせるをや要にてあれはみあれて
社に早振かりの川原に下りあれとしよそれなり彼降臨
の義なるんに御の字をはいれて只あれとのと云へきんやすむ人
神のこゝあれにあふるに当りとしてあれあり御生に生日と云
へきにあるたす程保やうのものを云へるなるへしなと義と
二つなりきすらをこそならぬいうにとしまそみよし折説
いと覚束なく侍り此世にあれといふ名より御生の字に附
會せるは古歌の読言ひなるへきに語之又四月中日を

降誕(コウタン)とゝこあれといえんみ何そ十一月の陳は祭みゐんや後
成卿の詠みすてゝ[illegible]きゝの日の吉のあゝみし野のこあれ
なゝ[illegible]是なし中の日とゝ又[illegible]なゝ[illegible]
別紙の説きゝそゝる山蓋(ヤマアヰ)の神とゝ[illegible]
こあれの山をうけゝるゝ所をさんのこみてゆるゝ
只ゝゝとゝいゝゝゝみゐゝ月のこあれの石をゝ(きんやいれ
こあれ[illegible]ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝさゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ(きみあゝ(月の
所ゝゝ[illegible]ゝゝこあゝ[illegible]ゝ(ふアレ)ゝ
義みて[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
いひるれゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
こゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]
こゝ[illegible]
三月廿三日

元龍元年

いゝ[illegible]ゝ他十年の要ゝゝ[illegible]門人金田元龍ゝ詩ゝゝ[illegible]
の事四説一二を挙げゝゝこゝ[illegible]ゝ杉志の考ゝゝ[illegible]
ゝ已答ゝゝ云ゝこゝ年ゝゝ[illegible]ゝ古書ゝ考ゝゝ[illegible]
合ゝゝて俗説のこゝゝゝゝゝ[illegible]ゝ歌のゝゝ[illegible]
ゝゝゝゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
おゝゝ世ゝゝ台記をゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
説の所ゝ彼説のこゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
四月三日乙卯晴辰刻出宇治手刻向東三條依賀茂詣定

也下畧廿四日丙申自今暁天晴畧次殿上人已下余出南門之後隨身近衛自御前外前行在官掌召使前次弟留居如常番長在後依馬場舎顛倒如去年着関白宿舎畧即詣上社畧上達部在余後陪從在其後歌風俗殿上人以下在其後着馬場舎如下社畧馬場立榊付鈴木綿庶人或鳴之下畧見物依くれをそれいとあれハ所付ゆる本綿の名みてかつも取ハいつくの社ぞ和みも鬼無くを詩の庶人一るすすものと向拍みて賀茂祭申の日ハ見と馬場ハ三條の京例なりきん古歌ハ所ゆとゆ云あれ乃一のみ引所のとよめる皆引とゆんさ詠みこゆるを今社幣かるものと又大小長短の差ひあるへ一あしく海哲ハ也へ年ハ愚考適暗答きを收ひく所記すハ文政九年十月三日也

藝物廣島仏本尊本の詠草み

姫きハ小りふきみてかつきみてかつきみ風の吹をひゆる名るへ一きるを京の風み記るハをきあり

すきる京にのこりふ年とるりきんされハ京ハぬきと云んとすなるへ一京京にのこりいひ別ゆるり雨みは云るく

なりく京ハ名とあるりさてそのぬきハ名雪み定りあるり今りふ所ゆりを又雨みのこかるりく京ハ京風ハ

ふきを風ハふきりと三京乃れハ寄みりより京る

三京風くゆふ年るを京へく侍論されあるゆる也

鄙元命ゆ詠るハ

いゆ一の弘のんを考へ京るみはよきなのまゆ也よみ歌

のためになる書と申ものハさんとあきものゝ花也古人のおもひとせい
多のひとへハ手本に成申ゆへまつその詞のことはをぬきとり
こゝろをとへハ柳の田代かわれ扇とも古人の歌を
盗ミとかむるれハやくにたゝ申ゆへさぬへハ歌詞よむにもみなよむ
みるに筆也と申ものゝ名をゆるしむる識をたて家書をえんするよくゆ
儒佛神ともいはれるとも誠に只これハおのつからん融通して
すうともうたかしきこと詞しんしん出来かたき也せんへの歌
書と申ものハ三百年もの法山有る中は六七百年前のハ
詞書ハ至て稀也なほし有てハ今の紙に板行にせし絵図
あれもしくや論見し筆にあらはされと手歌書あり
世の人もこれしく上下也詞書をよむも中々に成て候も
これ作者也されハ歌書によりて詞にあるものゝには誹次

古へ人に見をすさんと白頁をあらかしめ万葉にあらて
其思ひのまゝをすみやかに心のくまをもやさしく見えるれハおの
つから妙なる調への出来るも是天地の心なれハなるに
さりとては鬼神の感をもうこかすと云ふ境ならん雑し鬼神感
すなるとてハ実に人の心も感をめてやと分る歌の情に似けしこ
勢州名張合子の詠のおくに
蛍火とも申も世帯にても申さぬ事也これ歌ハいかなる事にや
古へより蛍をほたる火とつきとてすみなる詞見し伝られハ
昔もそのすみやかさぬこともやされと此方にてて捨ひ申也
年と云ハ古より申ならはとて今の世の人のこれは蛍火と申さぬ
人あらん又蛍にそれ出る人みは知らさる火といふらん
ありとより也狐のそれ火をきつね火といふにも同じことか

すゑ／＼俗にいふ詞の何ともしれぬ詞へなしたるハおとよみて
何のさハりあらん或説に営代ほそ火の字なれハ初ハ火とハ
火の義ニ事を取よすへしと云ハあらしぬことも也此へハ初より
初の字火の義なりとも物の名となりぬれハかやうにいひ出しえん
字何字ハ佳らん硯ハ墨よりの義なれハしすゝりのすみと
いひてハすゑえん分ハ分えての義にとて筆の中に文の字
おもし土のりとよみへきんやされハ世にやさしぬ字に侍れとおのれハ
椿ハ侍しぬと椿んへき侍りはしう補要也
木賊　伊木玉樹へきん
さいはひの二色とかく字えくるしき字おほ形中より侍り見え
いふみやへはてしまふ語と奇瑞ハかえりくるへ字はなりるれ共
見ハたり熟ハ心を得ハなりぬるとおもひ入玉ふ所也それさる字

なれともまりの歌の上くハこたへ人の身へ字え合る上あて
社熟の風情ハいてつへき字に侍れたとへハ婦女の氣
かゝる物和りにゆりなりおもしろく聞ゆるに
やかにあてそろへるかよろしきは論なきれ也眼乃
所に鼻の方には作物にて不形ちしとをすさいそれ
先眼の下に眼をまり其れの所に鼻をつきて人のかみ
の形にしくほるすてハ女とゆにはいそれぬ也眼鼻所を
えゆる上にて不形ちかり形りんの事はくいかにとも
なすむへき事なりそこのハ歌眼鼻所をおもひゆれハとか
るり所にてそなく先く人にするにからねはなりぬ也それ
いかにハえるゝことをしらんかの所をとゆるへるを人に詠め
思とおもひそらてこれ眼鼻の上を様ひるなんといふも不怪し

きものみるりてこそくし知
世みなき化物也侍ま
書籍をよみ尽るを一つも
一られ侍り中きく人のに徳も書つゝめる人の言といへば
忽ち何事ともまえぬみる
先人をとるりく俗耳をきを言るりに思ひ入のほ
語と詩をて作り者人ハこゝみし癖者きすのみ作ゝ
詩を西へ行るり奇を東へ何ゝ也西へ走ものを東へ
るれハ品の人より一段もつゝ作ることゝ也さるに詩人
おすゝらく同し性情を述るに何りこゝるん和漢の者
めあるのゝされハ弱のたゝうに和てもうはゝくんはのもはぬ
多人より極地みるんこゝいとく速こゝ思ハ作ゝ也是西へ

走りあるを東へ行一世思ひ作ゝ言のあやまちを作ゝ言の
品詞へのゝみり事を識得されハけはゝひゝきを行ゝ也
一一の作法さきゝくもゝ詩のゝ作ゝ詩のゝ作ゝ
所ハ世詞へのかるゝれとと皇國(みくに)にて詩のゝ作ゝこゝハ
あゝくるゝぬゝも詞なきれハ詩ゝ非に詩るゝあゝな
とるゝくゝ詩人るゝ也思ゝ詩ゝ大和言すゝくゝ歌ゝ
うのすのハいゝあやゝくゝあゝきすゝ作ゝ也ゝ
ゝりあやゝすきたみ作れとかの詩のたゝり作ゝれハ俗(ぞく)
もゝの大道ゝりゝ人ゝ言ゝらゝるゝこゝ俗のゝ作ゝ大たゝり
人事ハ品ハ一歩を踏ゝ重たみあゝかのみ字なきゝ人ゝりゝ
たゝるゝかおくれゝるゝこゝを作ゝ知ゝゝ大たの人口ゝり共
詩ハ詩るゝぬ事を知ゝて作ゝ詩ゝ言を助ゝ

このことやふを称ひ玉ひて詩にもあれ歌にもあれなせにたまひ
まへつし今京師に大峯入とやことをなやみ作り其魁首を
先達と称へて俗なる初心の行者をあまたみちびきつゝ也
そも先達は指揮のまゝに深山幽谷をことゝもせず入事とう
形なる附日高の大峰は西よりも東にあるからに嶮にあり
うかつにゆかれぬ一心に先達の何とにつきて南無行者
大菩薩とる唱へつゝさくかなみちあゆめしそれ従ひ出し
るかとみいつのまにか彼大峯に至るも也さきを先達といふも
のも俗なる徳きものに作れ也大峯はかりへいあまた然ひ
のわけしものなれは大峯へのほるには先にすゝむるものなき
也哥も是に同し古詩も古歌も日高にさくれるの先達のうみ
随ひ行くうたよみの早道なり是は家のうちにてよりの修行の

ことなれ何きその道も志ありたる形ありしかも先達をあやふまは
随ふ先達を撰えらひて従ふの外なし名歌ある都の風客
なることなり古人のよしあれはさまつれ歌謡中にも志ありく居
侍りく眼鼻もあるあはれくすゑは覚えみたるそのこゝろもたれるに
事はさひ語らひあふてもありかし文字なりとてゆめ捨給ひ
ぬ此歌の勢ひをつくるにもさくまれしはくやうなるを感
じ何事も獲てんや入侍るも也けしきにひとふに稽古をまする
ものなり一先もして十あまつて早いにすゝみまへむ古言事にとも
すこしへすゝへその先は眼鼻を一時に本所よりへ家調
剤の某名に作りなすあしきゝきりや入侍るを幸ひに罪
玉ひそはよろしき歌になるんあれしこ

九月二日

かき樹

白木の一このみる

信濃国藤木光母の詠歌

彩くさ〳〵あけくれあつみ入侍るも實に歌すがとあり
一所也八〻一きは言をそめくいかぬ心ひも〳〵
七のよみさはめてもの世中の奇すみこそ一枝ども
常ゆき物の中に弱いこと〻るものゆ非に調ふるもの
こと〻ゆさくもゆ〻ゆ侍り古家のすきとしふを
見ゆ〻伝の歌句ある杜風みゆ〻よ〻言の語句
すれもの月のきゆ乃さやきに詩をすく竹一人玉ゆ
いゆ〻もいつて也詞ゆ伝ひ乃ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
伝一口かゆ〻ゆ〻一所もゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
るゆ〻されゆ〻七百年のをゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ

哭ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ月ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
感きゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
一首を伝ゆ〻ゆ〻驚ゆ〻伝ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
つゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ

なのき所み侍ること也秋風の歌に家上の調る所み元上の感ありそのもとに家上の家より出る所み元上の調あ
る也家上の感とは只端的の感也こゝさくるを家上と
なるひのひろ葉にて見るとも形巧こゝあき
所みめをかくしやはをさきて色を求めるふしんし
よれいこと

九月十五夜

蘇木秀人　うき樹

信西本歌　秋元英子見み答む文

弱い只実情を述るのこゝ淫慾もより実情ののるんや実
代実なるものよりこゝ古今の情を取りて意歌にと
いふこゝ謂なきに拠る古へ賀侍とてま婦と成て只安
の歌みれがひくゝ婚をるもこゝさるを拙作こゝると
みてこゝるこゝまま婦の所ひこゝ常み意の情後
ゝこゝるこゝ歌みれがこゝ婚み前ゝこゝると古の津みてこゝ
中みいおのつゝ世みあひ狩ふめこゝるこゝも文こゝ
あるを結武い恨こゝくさゝくのこゝひこゝてなこゝんゝ郡
縣の代いすの中大のこゝ後ずまひみ心ゝ時勢をもて
さゝ五の情をこゝひこゝる　こゝま婦とこゝい是歌さし
むこゝひみる何のいこゝ海み意情部こゝきなこゝる
さきかこゝりや侍こんさる歌ひのんより古こゝをいこゝみ
歌り暁みあこゝ歌をこゝはこゝれ邪淫とこゝひこゝれるハ
語こゝ又ゝ人れ意こゝみる津もなこゝとこゝハなかんこゝ古こゝる
をもつこゝえこゝ奇とこゝみるこゝ所みあこゝい也後世ハまこゝて

なるべく操を作りて死きかるみ弱ひなるべしされば高
ハ歌詠みそまるべしはと情と古今の（をきちめと加）
漢土し人情のかるべきを新ハ邪淫の字まし彼方を
いちをるべ只詩と作りもさちのをかるも恨世いと
作りをむ新とすることをおのづからいとさるべしされハ歌
をすべて恋情の催しみあるべし恋の情より歌弱のもも
れハ戒る所情みあるべく弱み淫しをとかことハ
文質のあひをかくべく論ずべきの只弱ハ実を
述るのことしいと字を変論ときて男女なを歌ハ
えすまぬもとすすはされもまたこの形ばかり
る歌をあめつきみ淫し古（童の歌弱ある字る）
ものとすりけ情なるれハ也又解ずるみ情あるべきを

病まて何を歌のをるん彼いるべきまつる彼方ハ
詩経といとしはくつきい章のをるべしまをるべく
交會をはいるる字めをしたるはるる言と同んを
答んをさーあひるをきハ淫しほとくみ恨ひく説を
ん事程まをかるんし何る弱のを色とをそん色を
よく説おさねハさくく人の仏様きせ又みをハ鄭の
宮をいってやむををよむをを同んみ猫侵の男ハよの
めあをさる字魚の目ハ似ものれハ其臭ハ宮みハ
こををんみいってやむをハ目のあををやと再ひをて
ものを答んみ書をきれををとをくやはは程可也妻
をき人をいってあの目の合をやと男女なを後
つ其はかを安く答んハとあなあてかの婉曲る

歌説んすゝ説みくうゝきをもうて止んや
けゝ言をおゝく歌うくんをし識得のゝすし
歌奇をゝを女をゝ人書をよゝの具こといゝ歌る
らぬ歌みしゆゑれとよき名ゝゆゝに芳萱のいさ礼ゐん
しゝろかとろよるとのおいとゝ一をゝを説ゝさは
貫ゝし恨湾ゆ成ゝきゝのゝ詰ゝいゝゝ難ゝあゝのみい
恨ゝゝつゝて義氣ゆ説ゝの也奇とゐて長をと恨る
一筆ゝをゝに所みゝあゝんゝゝ又説ゝさゝにも児女
心児女のかゝとゝゝゝを言をは猶恨ゝて況や常の事実ゆ
つゝて何ゝ歌の恨を解ゝさゝん歌の解を待ゝきゝに
いゝゝその恨なきゝはを説ゝゝに説ゝゝゝを恨おゝに言恨
萠ゝゝ説きはゝゝゝその恨此ゝゝに歌みゝて滝亂

をゝゝ恨ゝゝゝゝゝゝゝゝゝより滝奔の人也歌に罪みあゝに
又歌とゝ筋をゝゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝみゝ
何のゝゝ害をゝけゝんん

山如嘉之ゝ詠歌中ゆ

みを秋雄明

みゝの秋ゝ永さ（かゝ）ゝ長きゝ光ゝ人ゝいゝゆ歌ん
長ゝ光人をゝゝに調みあゝに芳添せゝゝゝ五月雨ゝ
永さゝゝゝゝ使きに苗ゝ秋いゝゆみゝんゝゝの位調
みて上ゝゝ下をゝんゝゝゝゝゝ調也味ゝゝ体みゝ人
をゝゝゝゝゝゝ光人ゝゝいゝみゝんみのあゝをゝさゝかゝの
使きゝゝをゝゝとゝゝゝゝゝ上をゝゝ調也

陶山真弓ゝ詠歌の中ゆ

野初春

美濃のすん社初を赤駒とのらきんも行やのうん
美濃のとものみるより社そもれとのみ押まて調せ話く
年あそ次美濃菜いとい〳〵はすえ社濃をとい〳〵調をあ〳〵と濃
を見みてを理ををにされいとて社初をと変をていすき
と云みは非次初白彩をまさ形とあ〳〵いすえ社初をとをて
調あをにすく〳〵そを〳〵理をのあをにとをを〳〵調ぬ
はをせく文を津を者〳〵調の遠所を弱みは非所をを〳〵
梅の本にあをぬをはぬをまをを〳〵をををのおをぬを
津い非〳〵を天地の彼をれ〳〵せをの白の日ををを
をれ

秋野夕

駒をきて尾も長きへ〳〵に名をを〳〵牧者の供奉
見はへのてをを陽きををををを〳〵を秋
の夕の風ふあをに荒涼をを原をを〳〵をさ〳〵ををを尾もの
ちをを高をををすれ〳〵下句吉事ををを〳〵を原く
かく理をを推ををさを〳〵をををををををを
ををの風を

軒端萱

梅咲をは軒端の梅と咲ををを定をぬ言葉
ををとなををと云をを定ををぬなを言ををあをらをを
梅のを咲をををを新をを梅の軒端ををれぬ言をををを
いひをを形はをんと言ををれをへをををやをく
さへのを〳〵おをに奇也世裏をを彼ををれの

ムすり又主ハ怪業師の中に又主ハ事也何ぶ耳之中
ハ大やう調ハ之ものまてをのるより

隣家梅

花のまもるやゆきを在こあ隣の中のくらの詳
見し梅の白ハ花もそもそもとあるあを隣の庭に梅のあるを
とそ伝いひおろくハんみすまぬみやゆ〳〵へハ詞て
ムのしんともよ〳〵ものをハ字えひとも調あるハ歌とりふ名を
ものまもちる也詞ハムれ見ともいをハよく文面とも調な
きれハ奇ものとりすのみてをかのき也

朝梅

朝ゆを初ハ梅ハ花ものを也まるこ英めるあ仲の林ム
まこ英めるあ長仲の林ムくれりハ梅のなとハ〳〵古くかく

雷光（ライクワウ）のまるみハ梅ハ秋ものをへる初ムの言也
こハ人の目を眩（ゲン）するみて静家人よりられハ狂言也ものく
といひ於て彩ハ拙きやるれて調のものけ絵こ為る
〳〵

梅雪

梅のムしあれてろ未梅雪をムれをとあ雪ゆ
こ至てし調ものあるみあるてこるる也こるるを迂見こと
るるといひてよ〳〵調へみ他ひ彩こるる也調ものみ
ものるハ且ものしるき檜をものく彩ものし氣のるる
きや

始聞梅

朝ゆを初梅を文より考へるるるムれ

[illegible]上下別[illegible]く徒上下ぬゝ上句[illegible]
下句部の友に行れぬるうれしさにて調あるべし又下句
すみあてすまうゝ上の句[illegible]初花橋咲り
[illegible]ときく調あるべし動詞[illegible]

兄山紀成東に下りて仕度ごろの所恨部みの写
きるとき[illegible]坂みて

逢坂に関に流れ[illegible]ぬきれ[illegible]
別いかく[illegible]ものを[illegible]
おもゝ[illegible]逢坂の関の清水いきよきれと[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ある法師の部藤のもくみ

出の[illegible]感部すく[illegible]
集みすて[illegible]
入鹿の[illegible]
みてすくし何[illegible]
[illegible]
一[illegible]その上句調一句回[illegible]
さらをいとひて[illegible]
調[illegible]
[illegible]
行みるゝん[illegible]
何みるゝんとすんとい[illegible]
[illegible]

人のこゝろにおきてしるべき類也世俗調とは
方式をみて其人の調ゝ人をもかなしん
見られ要之定家卿の罪人也きゝんを用ゆべきなり
世俗の西行の歌と世俗調のみ有り彼俗調の
歌西行をきゝ多くいたづらこい白隠和尚を俗僧
こゝやもの似る事みて凡界を離てみるをしゝん
をきゝをとをきとをつゝまきとしみて知ふべき事にこそ
世俗彼西行の俗あるをみよりて入信ゝ也おのつゝ境界似
あれ入るべ西行世上多くあえり
誤ふるべく上和歌のものを世俗を述んとそ上和
歌事也ゝ事をよまんとすをしゝみとは見別なれ
歌古也老中者式ゝ

仏ゝ中みのゝひゝあをれみおくしゝ
みて世間下調ゝみんをつをまくて西行みの似
みの似をおのゝ西行をゝ西行みの似ゝ西行の
を家が凡眼みえゆるものみをなくゝはれをを悲雲
法師なと始西行を和歌ゝ者ゝ伝れといつゝ西行
みの似ゝ西行みの似ゝ西行みの似ゝ西行ハ後成
定家の古郷ゝ上也をゆゝ人也為ゝ俗ゝ
みてゝゝゝ月に伝ゝ水月天上のものをしん
をみてゝくゝくゝゝ
源論あり第八章
ハ世のゝ
入門の人をおれゝ

大ぐこしらへることゝみゆ。そゝまをゝと斗にて
多くきゝぬ。古今のゝ似せるとせるもゝ
作りゝゝ津りゝみは付れと彼ゝゝいわゝ津を
なるゝまゝみりゝ也又ゝゝゝゝとて古のゝゝ
あゝしおのゝんみてゝゝゝゝやこゝらの不と見下りゝ
今ますゝ一歩ゝ也ひ分ゝ歩ゝゝ大津ゝゝかゝ
こゝるれゝ志をゝきりゝのみ有ゝゝとゝをは六ケ敷
津みゝりゝ多ゝいめとさゝ非ゝ下ゝ比すゝ志よきす
をするゝてゝつゝらくゝる津こゝ幸又ゝを
へゝゝゝ似あゝぬ津ゝ多ゝ古えゝゝゝあゝゝゝゝ
ゝゝゝしゝり何のゝ宮遠ゝ有ゝゝゝゝゝ遠感しゝゝ
弘去ゝ所の文ゝ也又再ゝ東塢ゝ入熟ゝて西ゝ人ゝ

中誠ゝその文ゝゝみゝ紫ゝ所一油ゝゝゝゝゝ拙ゝ河ゝ
ゝゝゝとゝゝゝゝくれゝくゝゝゝきゝのゝ彼ゝゝゝゝ
似ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ津ゝゝゝ世上景樹ゝゝ示ゝ合ゝて若ゝを
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝこゝゝ門ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ彼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝこ

三條宮信中將度部卿ゝに

ゝゝゝ四部卿ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はんをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かへりこよ嶋もとハ遠くまたみきり君か住ゝ家の中山

信州須坂蔵丸山辰政か詠草のおくに

おん家たちらきし口さ伝ふらにつゝみはさらにあらしものとも
家れ家のゆる本こゝに納得なき旅にのこさらましれ格なき
舟のめくとはいゑとや示ハさらくことゝるみはあらし
しるへに有事には調へ事一には調ハ創をてつゝ也すき
ちるやしく上京なする家の歌よめる本旅みゆ上京に住みて
たかみ仕こゆつゐにえぬんまて本日ひとすく事ゆるすの
みゆさるを感慨なるきに家とや也きこるみて何かと
ことゝりをつくしゆても志るへのえぬハ事え緒ゆて
有とすり感なく要領よりもうきさるて家りけ旅に
取家の家ハことゝるりのみあるえれしるなすの也と中事ゆ

也ことさらに此事ハ先年ゟもみやと覚えはりおりゆ歌あり
よめる詞ハ家々の上とも優美なる方ほまていまぬミゆ
古人序家多く枕詞かれたるハ只伐しるへをとゝの
ん為也さるてハ序や枕や実に無用の長物みは家ハ
そさんれとも古哲示されけも理屈をいふ事とすこそ也
小児ゟとか事ハ常に持そろそろまめくしき義理
なきいめのみよりへはかゝへてきくて計か家也とかしゃ会得
なすかりきりハ此の真面目ハ見えすれ旅に形の世事
大やう緒る事みゆへハおしくこゝを用ひてハ叶ふまし拵組
のしるへ草絶ゆるをは予案しる人なきハ迷惑の
事にゆ只右へ行き左へ行の迷ひにゆ何もらくき合申候
然しゆへしからく[illegible]跳りハ詞に無理なき事ゆにあつきに

徒しまゆるゆゑみ感んすゑ
ゆゑ云也すゑ
夢みていしくいろみ
れ〳〵ぬ為海也
の感動もの
とゝ聞るあれ
琉球人浦添王子朝喜の詠
おむ歌詠の
ゝ雅
くきのおりゝぬ
あやまち
るすのみ

為也すゑ八ゆきゝゝ優次みゝいさゝあり
〳〵き云葉を用ひ雅歌つゝしてかゝみ
界の〳〵み階さんやゝ心ゝ〳〵き方先哲の教ゆ
多端みゝゝ只一伝みかゝ
おのつゝ考閑みて
なつくゝりみあ
とゝ中ゝれる法師の多端
多の聲とゝ
きゝみむゝひゝゝ
詞も一字半云みて雅
多ゝ感ふ感のさゝ
き半みゝ云ハゝゝゝ

されハ諸奇の祝詞ホ我ゆるき事あるとさしらさる
事なきにあらやうみ中ハへハ此不審数件ニ及ふへ卜
然發しいたさしゆゑなく打返しハ研究も来りへ思老
命のかきり此答や是へ病ニふしゆらせちぬの
よの統下ニかきるなくりハへいなのしきおもふのにあ
なりしこ

紀海吉平の春樹

信ある諏訪人今井信古の詞書に加筆なりして
示されけるふみ文

詩ニ歌格あれハ文ニ文の法あらんハいふもさらなる史也されはその中ニ
詩は上ミかなきく文ハ化をやすきしますと論なれとおもは
歌をよみなる皆もさ文作ることはいとも中ニ有やすゝきぬ
はなせるハ文のことつやゝまちかきやんいふも仏我なるへとあ
せんしてなんのかりみかきゆゑてかきなすらはんなくしかもいはゝ
すゝらん人へなるへしさらんきさんやさはさて何の上下の調を得ん
唯に詞我ホみはあらさりきなし
天地のうごくしるへと飛ぬれハこれをおのゝの山峯の高風
かぬるく詠まれるハ人さまのなるとしへならんへとあれなと

春樹

信州諏訪人高坂久寛か詠草のおくに

御よみし口志の用におもふえハされといかねるこ心かいゆゑに
及ふそのなるきこ一そのしるへとそこなりハニ詠は
こゝろのかなれしらみうすのやとやまをれ人の為り
へこゆ何ゆとおもひろき読句ニても風雅なるへみてしら

多かひらへハ文に云ふはるゝり予ゆはしらへさへ思ひの□
いきらハ理りハ字え乎すとし云とはやされは也しらへ
云也しら分をもて云とある作るにハ言調ハあら耳にハ
果かと字一里なき事にて先指しすやまれ侍る
事のよしにはされと大やうハらや似やりによむ事
にてらや比とりふハ品すきにて上京にいやうれハ系
ら世れ云ふへにてしらへあきても那しうれは中あいひとる
ちをすくしらるとやは也古今あると叶ひて系よみ
云しよみ有らへ見てすらしと何の事なる思ひて此
取似る世らにすをまつ楚古の山口とやへくはをくハ
赤人の田子の浦ゆゐてをくハ詠備の秋風になるよ
ゐてあきとにナンテモあき事にことも格世雪のことは

云くハ只世もへ耳にこは多古にも出れハ今の意此
ことは古今に入れるはたさらんや大猫まてにありある事也
流有すりもりの月のさやきをりん又同しさハ詞に曲折あ
まやとららに又なる云也あやしきにあらんやさ調を
得たる意上を你くハ人ハ麻呂貫之の家也比しへ思
云ものを志るされハ古の歌聖にすきをはいるてはしらん
されハ目あていいしくしうれあゆりをんくへき事には
先まって策らしき事にすまよへられ儒を学へハ孔子
佛に入るは釈迦と亦みしとめあてあき事と亦まらハ
云方ハいらハ山柿紀氏の亦を新らにへきに准さる事
ゆらによへらさる事ら　昭朝亦御為是にやす不明
乍る古今備る井合甚紛擾謙京もちやくにらハ形を

あ〳〵く失敗の〳〵を重ねる中に畏れをいだきて使はれもせ
ずつゐに光を世に放の石と成ぬ
七年氏みな世乱れつゐへおきてされあれこそ

先後十八日大雪同一首を詠ませ給ひ一笑

同人の詠歌のおくゆ
ゆかしとゝくすく文えりへとしいとく調そのひゝ松ゆゝと
のへ有ぬ祝ひ調ゝをす云詩歌は付れと可之義祝
ゆゝりゆゝ上ゆゝ者〳〵へを之〳〵へきこん調そのゆゝ云調を
のそれゆゝ弱み歌ひゝ調の詩ゆゝと月を月ゆゝく花ゆゝ
祝〳〵すむ歌は世花の中みても山の花ゆゝ山ゆゝ
らく川のもゆゝ川もゆゝ庭のもゆゝ庭のむらく花

開歌あり歌連あり歌それ〳〵れ〳〵れ〳〵くゆゝ也それ
歌ゆゝ行ゆゝと祝ゆゝ山ゆゝ山ゆゝ雪ゆゝ雪ゆゝ也ゆゝ
ゆゝ也歌ゆゝんゆゝ一ゆゝいゆゝ雪ゆゝ歌ゆゝ一雪の
みみ歌ゆゝりゆゝあゆゝ祝ゆゝ歌ゆゝ
ゆゝみみ歌ゆゝ行ゆゝ又通歌ゆゝ
ゆゝるゆゝ雪ゆゝ祝みゆゝ
母ゆゝ〳〵又ゆゝみゆゝ
父を大〳〵く母を物〳〵
ゆゝれゆゝ者ゆゝいゆゝ
ゆゝるゆゝて父を母〳〵
ゆゝ歌ゆゝ歌ゆゝ
ゆゝるゆゝ

よくし　けぶりみこと　けぶり　個先れていあ流いこのそれ流や
弘きや　　うゑ樹
くよ人い事。独つのいやすすかこてい汚事の分短高
いやくゆ人ゆすとゑ
信濃人大伯直章う詠をゆ
言
その京やそのそきこそ足ぬまてきたふきゆ大言う降
大言るとむさとよむ人に非すやてけ分ると考う云
不みて聞くい言う降かるとすくし
氷
駒ゑ人ゑうゑ計ゆすのあ氏こゑるや祇のちう知ん
けぶ本事ゑるれすくゑせあうえいみや

実やてつまん根者しやえて陸奥のい氷をあてき
ゆうくれ流ゆ方とえさりしゆい氷みあふれみぎり
氷そあんいちやう初々うり実やてつまんとゆあ人りとるくや
すくゑ乾勾ゑ事也乾勾めておゑろ氏すのゆは伊氏
ゑ人のゑ事ゆて分とゑ分ゑこと中ゑ也清
ゑうゑくあてそうに方人きゑ又論ゑ多保波のをゆ
みゑきゑゆ色きをやすくゑ泊あ人ひてゆゑ例き
ゑ乾ゆ氷そ氷みあゑるゑと考ゑやゑみて
考ゑしゆえうくや

初春與

ゆそゆ方ゆ氏れて小松ゑ氏そこと氏ゆ見氏考氏
学ゆ方氏角井ゑ人のちはゆみきそ実い氏初り

堂の前にまれてとあれハさハ川ある方そさいとされけるせそこ
としるしとはいそれたるこそしいもぬ旅衆してしかるこそと
いそんぬるぬるとて見るよへし　堂の前の田舟ある
人例の詠ともおくころをわりていつ　其ハ此の風光
みやいつれことわりても見るるみあるすや

川邊柳

本多路川邊氏なんてしろくのみなきを社の荒さまき柳の系

老子

嘉陵し小笹の下に若芽のめみつく其み紫にきる礼
むさの芽のまとつ二葉て露にとう萩もすきしかるぬ色ふ
本多路川と中川にや本多川の字ありいそれすれ
氏名もくらくなしとの三風をとめてさるれし　とまりるれ

とし川邊柳なをさ初いさる入から おもむきをといへる ハ三玉
あまりのとゝへられぬ中にもある字まれにみいんすへく
ち尾詠と云示内つみものへと見詠には仮借なく中ハ
矢継なるを悪いは[illegible]ありめあらん是下は挑んの字
あやくよまり形をし字なれハ京社友日標にやの悪茂
きつあんをしられたまゝを読む一語をとしむへきみは
嘉さえしハ詠めきには[illegible]をもめみつく其みも出にみえる礼
申るれし中すせむしとつみて葉の露こりもすへくの[illegible]
さとりしく其町陽炎氏のとやきなるしるへみたかありぬ
不せる者へハゆりくとあゆむへきを小走をするせるみ
古ゆるせみとりるするむとつ草とりて其ハ[illegible]しとや古色の
しらつ中を心静みながら[illegible]へて見するよへし　ちのとこその[illegible]

源実朝 猶此て誠にて（まことにて）事也（ことなり）
あ載み名をそむ（あざみなをそむ）きのさうひ（さうび）ぬけ（ぬけ）て（て）夫（それ）
こあ（こあ）れ時（れとき）心を用ひさる（ひさる）（きんや）婆雄の不幸（ふこう）に
の幸也そやく（ゆくやく）邪淫をかこら（かこら）て（て）心願の一顧みて即
菩提み入ぬ（ぬ）（に）は乃よりすみ（すみ）て其松ばらき世
と（と）ふ（ふ）ゆく（ゆく）いひそめて（そめて）邪淫（じゃいん）をいと忠臣義の乃ゆみ
そすりのゆん（ゆん）為（ため）て（て）世中の大宗迄大やらさう（さう）若
をの（おの）へ（へ）をこん山柿九紀の海をみ入んとそ（とそ）みのみて
あ（あ）れ（れ）こ

四（し）こ（こ）の（の）詠（えい）のみ

いき樹

山弱のすのゆ（すのゆ）めき（めき）と（と）をあ（あ）り何の欲（よく）を（を）みんか（んか）

い上（いじょう）を（を）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）く（く）中（ちゅう）小数（こすう）ゆ（ゆ）り（り）ゆ（ゆ）み（み）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ

はなみは是は笑用ごんえいとも論のかれをいえん恨
なくいに成ことのかなる犯るる仏御のこいてきらせ死い歎
声るう歎声い長息せされれいその言ゆゆゆゆゆゆやるん
中分論みいらは御のすうをえうをいと平言すも
うまてつまりくきるくきえいみや又歎辞い身れ
りもくもれい即誠るり誠計天のいみるきれ
なく蕭いきれるのきれいの海いりれみるれは
いうくき中又論るりもなく天地鬼神を
感動をもるるもこの**長**為義を消みるれ也
されい上和みけるくきるんるるさんとすい
けれの使りみてれみ何中も宗はるきするそ
のひりいる犯るくてんの耳みも字とりやるる歎て

祈るり歎歎もるる中と形りるせるの分れ分のるれ言
を中みて名いるるくき恨みもあるる文るいりよん
くくとい互みんるくくき中るるせいれんと考えれゆえ
あきをくまをくるるうつを恨のるくいれいて名まに
いるるいい社友みしいこるるれるあるるるれて入れ
お稽りこ
信あ浜坂藤原山辰改御のあるる
すくくれ形上をみえんれる侵ひくやてん中しる又サ
らんよくく泳くるのいよく溺るるの犯るいれ使て使るの
れ法進るの乃ないるるれにの解るるまみくれ乾みを
大やるる定るくる病れる性已いるる事をの(を)人みるんみ
れいるもいつのよみる優るる姿失れゆくく人み賀いれ犯

のかゝ式い風人のこゝろいて礼正然なくする事こゝ古今
集るとゝ御熟ゝ此ゝ歌ゝいよく きちあるとゝ下みてゝ
歌い天地鬼神の感する所ゝ利にゝ人きやをくてゝ
ふゝゝゝ人みてゝ中さい温厚和ゝ長容のすゝゝ形てい
をくゝゝ言葉ゝ示みゝ追めゝくゝゝ行ん見別こゝ見るゝ
形ゝゝゝゝ歌と中下ゝこゝ大阪をゝゝゝまつゝゝ
俗ゝ地みは言人ゝ一首を発るゝ中ゝみすゝくゝ
上京ゝ京羅みのゝゝゝくゝゝゝ行ゝゝゝ
事ゝ歌ゝ西大優閑の所みおゝくゝゝと形ゝ
詩るとの歌ゝは歌ゝ遠ゝ事ゝゝ下ゝ言ゝ事ゝ
粗正義の總論みゝ中ゝ西ゝ御ゝ

大西吉郎ゝ歌集

京ゝ熟業ゝ行ゝ徳句ゝ中ゝ歌ゝ言ゝ
俗ゝゝ行ゝ詠歌ゝ
ゝ言ゝ行ゝ荒涼ゝ
ゝゝ家味ゝ人ゝ
ゝ大郎極ゝ
ゝ京ゝ女ゝ
ゝゝ宮仕ゝ
ゝゝ方ゝ
ゝけき事ゝ
白ひゝ

こゝ嫁こゝ[illegible]をいふ[illegible]ゝ嫁こゝ[illegible]
と自ら小人らぬこゝきたいとも凡夫伝くれぬん
きてたゞ[illegible]ゝ[illegible]みはあそこと世をかくしおし
おろ〳〵紙ぬ良偶の[illegible]と一人はこゝろみ嫁こゝなく
先[illegible]ゝ一世をこゝ[illegible]ゝ[illegible]すや世欲
人古学と唱ふるし学とし[illegible]ゝ[illegible]徒ゝ
ぬ[illegible]ゝ作り見下ると武[illegible]西洋るとあやまていかの学
み学ぶすゝきこゝ法方門下ぬけ世多くゝ[illegible]責
辺ゝ[illegible]ゝ不得ぬの弱ゝ[illegible]ゝ[illegible]ぬ[illegible]ゝ歌ゝ[illegible]て
世ゝをみしるゝぬゝ[illegible]ゝやむゝ又サゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ぬの時ひをたゝあゝけゝゝの世世をゝゝん
世ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ぬ

あゝゝゝ[illegible]先哲の宣[illegible]ゝ家和より入らゝ[illegible]ゝ[illegible]ぬ
入ゝ[illegible]踏ゝ[illegible]ゝ中[illegible]ぬ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
千[illegible]世[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
をゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
止ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
をゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
知ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
述[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ

殘なりと先指やされいの兎角なりの殘數なりの狀及び
八仮借なり〻條をやの字一時年よりことなり あきらかに下
つやのからみ芳さに実なり日考遠をこれに易ふべきの
祝なり〻 記念なりて書なりの部なりのいの部なりもしんすべつき
〻 やまなりしなりつきたりなりしに熟考所る
所なりに也

村北延翼に答へる文

侍る者なり仰なに西方学うるなりすの西侍に決しなりかしの古
筆のこちる國の中なれの西部或人雖問方てきまれて学を
論みて有一京西方論みあること上学は仰の妻をなり
ぬといふなりもあるに解雖又西文字祝呼るるまさに
百をあたるなり詩なりんつよるるに学みはいるのに

方式なりは學なりやはに彼人に学なりの学なりの
拙き清新の歌なりに八武なりの徳なりかにはしに奇なつき
何なりに下陳学に学なりに式なりに又は雖あるきなりとも
学なりすに学いに楷なりの為なりの歌の学に学なりに下なりて荒
学なりに遠に必彼人なるに学なりの学なりに学なりに歌なり論なり
論なりに彼なりに学に祝格を学なりに初なりの徳なりの中なりに
やに学なりの学なりに十なりに彼なりの理なりを論なりなりみなりに学なりに奇なり
なる学なりに学なりに十なりに論なるき奇なりて調なりの人なりに学なりて
なりに学なりの歌なりの徳なりを学なりの院なりに学なりに学なりに樹なりに学なりを
徳学なりなりあるなりに学なりに学なりに学なりやなるなりに学なりやの所
昔なりの学なりに遠なりに学なりに学なりに学なりに学なりに学なりの学なりに学なりに学なりに学なりに

調の音にうつりかはるのことわり弦調ことのこゝろ
世調とゝらぬうきうの人凡男子の歌聖人御音奇なる作き
こゝろ及ひのき 流れ来たりて中古の弦他の弦也
雖くやいんを所みの家こと多くまゝ
りの世と名をゝ宋こゝは復雅なく 作り所の渭三なく
あるてなりのき 宮人をひり考樹の家数みもあるれ
こゝもはりとてはなる文字をいるを百名数といるりて家
みるれりとおもとれりつ世白樽をゝらぬ事みりをてきん
数と年りする 数方みや作ん所あゆり調の事
なるとれゝ古の法流るき事ゆあり しるゝんやが
あれこ
流是者任の弦の家のおくに

八雲御琴つ法得主の事もひすよりて歌ゝ所
ひさいゝ志のもう上所いよゝ大事ひゝ歌とのもと
つとり作とてのくゝ志つとり作 弦の所謂調の音に
ものみゝ調とのを数ゝ歌みてなくゝ家みて弦の
和を作ゝあるゝ数ものを業る事 倫き也調とゝ
家ゝゝ事ゝもあるゝ 歌のすりとい家数の上八家
ゝゝ天帝乙女の家ゝ象りてよくゝ夫ゝのみんさゝ
みゝゝけ世みてもかこきれと天子皇后の所ゆみ
あてをる こゝ反すより恒事るゝたつとり極
上京りきとく 為家みゝゝ上き 家るんゝ又倫を
歌の家ゝ見みゝゝ きゝみかくゝよとく 天こゝ見ら
くゝれゝ 家るこの あもむきは上下 持るこの 家きて

指袴まてしゆく さんかの事ありかきり又公山あやあきよ示
るるんかこゝろをさとさんかこゝろをとりを弁
一とするかい彼来帯して進退動化のこゝ弁するこゝ
調をよくすると云を云とすると也弱を弄れ位みおんを
すゝ調のかりも九章代四ぬかゝ〳〵ゝ井又るすり
こゝろ海代さゝくむこゝろ有なるこゝろ所行四条の位
有る花街柳巷の海あるこゝ敷地を又こゝ鬼弟しこゝり
感をこゝ〳〵ゝこゝ止んかこゝ方ぬさゝ〳〵
こゝんかぬ見〳〵こゝを弄代さゝ〳〵き城ぬあるこゝ事を
中こゝ代るこゝきんこゝ弱こゝ井むこゝ井こゝ〳〵ゝ石こゝ
ゝるこゝ代こゝるこゝを有こゝ〳〵ゝ生涯代事〳〵をゝ世代を
かゝん義こゝぬあこゝて人ゝ命ゝ助をこゝ所行こゝ

弱の弄ゝ調のこゝ弄也一如ゝきて人の目を驚こんのを
〳〵こゝ神人の感激をおこさこゝたゝの手石のおを祝こゝ
こゝを見ぬこゝるきんこゝを世代興ゝこゝ代行こゝ
ぬこゝ〳〵ゝ生感誠のこゝたをあゆきん峡崖ぬ祈れた
事ぬ人こゝみ意ぬ光こゝつこゝれこゝ天を踏こゝ人をこゝの楽
世代こゝて鉄弱すこゝぬこゝ人ゝ今の弱人の見こゝ世調の上を
會得せさ主い山柿賀船の宮ぬのこんこゝを代こゝ碁形
後家の宮ぬこゝん階段ぬ代こゝ〳〵ゝ雙雄ぬこゝ所を
さかゝん得こゝ弱こゝて又こゝまこゝ後合されぬ所こゝ歌の代人ゝ
いなくこゝみこゝれこゝ形ぬかこゝ〳〵こゝ古海をゝんこゝれこゝ別ぬこゝ人
こゝ主こゝ中ぬ所こゝて代こゝ中拾こゝくこゝつ世年こゝ高こゝ後信
こゝ代こゝを代代かこゝこゝて知こゝえをこゝろこゝつきこゝいよこゝ

みれば羅かさねる物成はいとせいにおぼえ侍りしを

長崎人濱武鄙治郎みるーをーにする文

所まのなりきつあまりてーをーこのおもとせり
蓬れ実るを沢とそかうちすてゆるはのあさ
みはをれいとしくかりつりくるるぬこゆ
るきれいそきのくみすみまよせるをつのきるれ野川の
波紙さやうるんるるあしぬるるむつをてうをー
まるすつるあるるへこーゆるやきにかやきるをの用
るる個人の細きめるりてハ何の光ん侍んさそさて
そこをとりつきのへる濡衣のうるいるのきをいるを
きんやのあるる羅るるをうひはるみるん
くむ人のるをさへるるみ濡るんうこあきるの山の弄よる

歌英用の見えれと弱をうきます（玉をぬ所み
ロ和るるくるへるて三好近松るるの戯作乃乃行形と
より俗彼るれるみを弱かく卑俗るる流み淑人ゑと
をそのりをーるる知るるとせまる歌い永云すみて
常云よりもいとおるるるみまやするんるものるやるみを
歌りへきりのるれるるぬい弱とし常れ云すりしてるるかる
きはーくすくきたいまを面とへ乃るそれる作るみを
まえぬるるへるるるそちるみ方面きをーをまれい
人感するまれ人感やんるすりれ鬼弱の感しいて
方へきする鬼弱の感まるをいるてをそんこい一はの感るの
こと云人をるる一はれ人ぬるるるるるんるるるるる流りの和ぬの

かゝる人しなくして何のゐなかびたる歌を詠さん
又朝廷のさはるとてたゞりすくつてきまゝに作る
所ありてあるひものみ詠ずして何をそゝるものゝ也
なりとゝみも見をんなを多く作り人一きはんを用
ひむとてうつまて歌のみやすき事を知もつて是を
古人のんをしをおのゝ中をしきるゝとうをつき
もつて昔ゝ古今の歌のなかとしこれ歌
ものゝ何のうゝき事ゝ侍らん古今歌の耳遠きはまを
と何のゆゝうひれ世かまくゝるゝ歌詞をとり事の
をとおのゝうゝもつまゝ作りあんゝふ
庭上鶴鳴
庭木光ぬ
詠草

芳野つゝ花を見ても春の俗石を踏は紅
おとせおゝ切ゝるゝ歌ゝ春ゝ春ゝ
こゝゝゝを押きあて侍やうゝ
世ををゝゝて詞をしおのれ歌を詠ものゝ
おゝゝるものゝ詠ゝゝ作り文ゝ
方もあれと詠ゝ歌ゝ
こゝゝ春ゝすゝ庭のゝ
の庭をゝ詠をゝ
春ゝゝ庭をゝ
とゝるゝとゝ又ゝゝ
俗石をゝ
ものゝ庭の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○一言いつかうまつる
何をいつかうまつる事
〜長中納言の
むすめといふ人の

推量さうなんひとしきことのみまえ侍る事
されい所しなすき事也弱かの思ふ所を言葉
きの歌つまひやさんやいと侍の口上をさうなる事
まよ〜〜事はひとしきさんなるといえんすり歌をこと
侍り人をいれ侍るまうしはうせ侍りなのとを給
のもこうり

合子の部

やれるとよ侍ひとやすきうまあるはき事也やすい
形り侍しれの事い世の中さうあるうり
侍りうへ人い法度の孫ひ侍ひうひの人をおうしん
見ひとく鳥羽光院卿の孔をあるすのことを
を成のあれれ御所ありもの尺文侍ひ御

みは源きいそれ方〜用捨ひ〜ひうて〜さうをこと
うう〜ひ〜ひ〜ひ

ここに春のはるくさとしらるべきれ文字みよりて春みおもを
ふりいたれるくやはるくの事

形をき井の間みるすがたをのぶ神ひろ彩たる朝の色ハ
新てハ道を言ふたるひろ彩のもとしるみすゆること
らうハ方法きりかのさハ方法と詞の西南たること
すくすくひてもこの歌みあるしいやてもおりてもすたこ
西的なるされハ感意ハたなき事ハ作り歌ハ詞みかるハ
節毎ハ遠ひもはるぬこもやもの朝の色をもひろねる
るもつるれハ歌ハ歌るハ

道をひろ言ハ言ふるハ旅衣く
まくく世ハ品藤とハ旅衣をとるす
中世すりもすり作り文ハ有すきもや

東路や行もくるまかるハ頃のやみ字ハ其や
東路やのやみ字ハ其や
文字をもこりもてこもるもうやなる而ハ色拙みて世歌の
こくく東路すり行もくるもくふいひてを雖き歌
やと色くく間を過らるもくるもくふいひてを雖き歌
云くけふのきんやこハ東路ハと色ても東路みといひて
二句みつるあをとひてやとまくくいくりのもくる事
有へくもあくひをこのやの境の山くく石ん野やこるほき
るくのやみ字ハ只乃ハ有るのくさ段を笑くもさハ
の色ハくくつくをゆくへくやと色くくしやみ字ハ
古くのひハ恨くハくいとくくりハ作り

暁懐旧

むーもるつきあて起ぬ悔りとらつ今ハ奉れ行り
見らおくりいよく学えて注しやはとハ偏傍し
されとさてしくと方傾きて感表す調ハ文り
形一世歎るとい感情方へきもの也弱ハとるもの
涙ひしふるものこと学中四方傷已法師ハ中数
定あて学知ものハ一けし訓ハ傷り記く彩つもの
さりつる悔りとおもつて悔一晩の窓るとあ因
四一見しよりとやはくとみは傷しハ学理感
きてもと学えてと祝なきと中を傷也偏弱く
ても表と学拾るを歌といやは傷也今ハ学ハ
乳ものつるく出ひるるハ一けりきりるびし
学一東も地のくせとやものを傷きものあて恋ハは行

ぬ中也人いまひゆるくとやとも人一かの面を摑の費
恋ぬ中一也
一ーとへとや中学むつくくもるるハ文ハ傷しハ
き個の祭京二三果より注ハ一羽ハ敵ハ学
きとへきりのハ傷しハ人ハて拾ハ百義ハ
英重まるくとハ一傷ハとも見下文ハ語ハ一を個
傷るれてせいりハ吉部ハそしりるとハ傷るんかり
ハ傷と云中ーーるきるれハ語る中海ハ又ハ家
百金とあハんとるとハ人そこへハ一重と中ハけとハとも
絶ハくるぬハ一ーこハりハるくハくハへき調れハ
なる。傷ハ傷孫傷穂ハ学知る中也見を個へを知とるり
て横といそしとも横くくハ横也その表ハて横とこ学

されいやるといひやるとふい言葉こて
きんふこことものあり
その真

一首ゝ云ふよみ人のなりとも楊めぬ人ゝ楊の弱とは
云難し只云ふ〳〵まて熟考し玉へ伝ふ人〳〵
文をもつて〳〵かゝぬ何よりも歌あきらめ実に至道無雑
みなりこゝろの花のこゝろ

一説へを書るゝ〳〵の事形なぬ伝のやうに書
るゝ人は伝れとゝを用ひ伝ふ歌いとゝ
伝ふ次古今系譜に為家卿ふるこゝろ
へきるれとそれそれ〳〵ぬ今の万葉人合伝ふぬ
ゝ也古今流のそのゝ聊説書伝ふを装
中ゝ云ふに書ゝ〳〵る人伝ふそれゝ文を写せ
ゝ送ふ伝ふそ〳〵かゝ歌と大概を書ゝるれ推
て知ます〳〵されて次ゝ伝ふものいはゝ二句ふ行ゝ

今考ふるに伝れ誤謬ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

藤原定家の詞書の中み

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ると所もち世人の物作り物をたくさん慈悲と
いふまことの道の古今行みもあるべく作りたるべきと
しかるに物のそこの〳〵るみ淋しを信じ事いきくつよき
ものみはつよきに物のそこの〳〵るといふ也俗みも祝辞に富て
いと品物にたとへられていふみ淋すや乾天地月星の事みて
教をまもるべきこと所とのよみのいと実にてこの
やとい法あり〳〵てあれもてあとにふみて文みをはく
もの和歌の道云といふ〳〵ものをまことをこと道のこと
世中にたとへたるもの和歌すや只誠実の事ぬ
ぬ歌に所之誠に富道の基本おもしろみをくれていかのこの
ものこそみ淋しにたとへ〳〵ものをまやてをけ当時
いかもく〳〵云ものなどひむとん実みに歌に只一つの心

潜て世人の事ども作る事也又已に人みな新中作れと乱もい
ふみ流行き事のこと作り世の中歌のこと語ることなるみ
あり若き時のあやまちを脱れ
故に作る〳〵ものみこと〳〵ものを三て
淋しに手作る時み用るを小也又語はをこと云せ記実
小貴者の人也さる人みあ〳〵みに〳〵朝りもへ〳〵
に歌の道〳〵〳〵もひ事をよりかのたみと及ひ
流儀〳〵ものひ事かるれい悟を事業
作れに已も多の花を作れに人の上まていひのこる光
為也こと〳〵〳〵熟川徳已玄説る地獄吉容るて吉事
東京屋れうち西西の書新学者とものを写れて
帰りあり〳〵そこ立〳〵れをまる〳〵をよとや作りしか定めて

[illegible]
[illegible]
[illegible]

殿よりをさ〳〵人かなるみ言こゝ見し常ならぬの人の行ぬ也
一人し所にとりつゝみ服ぶされいみゝえんとりゝとゝ見也
されと山里なるゝみ むこをきゝ人しゝ見えんといとゝ
をゝぬ白ゐれとも見もすく見ゐゝ一二人ゝをゝも生きゝ
下言ゝゝいふ侍ゝ也をきゝ〳〵おゝをゝぬ所とゝ俗りゝ
めつゝめにかゝらぬとりゝやゝ也侍孫みゝりゝかゝるゝ
似ゐれゝもゝのゝゝ言ゝいおゝゝ見ゝゝ見ゝゝゝれの何ゝ一ゝゝ
解えん一をまて物ゝつきゝ事也
一きやゝきゝ世侍ゝ侍みゝえんみ侍いゝる格をゝゝきゝやゝきゝ
ゝ一つゝまりゝゝゝ事云なきゝ事上ゝゝゝゝ所ゝゝて
いゝみも尚ゝし強暴ゝる行ひをきゝやゝきゝ仕業ゝいゝ
はゝむゝきゝ仕ゝゝゝゝゝゝゝゝ虐政をゝや

きゝ政ゝゝみゝはゝゝきゝまゝゝゝゝゝゝゝゝすゝゝ
ゝけ侍のゝゝゝゝゝ見也と今ゝゝゝゝ侍ゝなきゝすゝゝ也ゝゝ
ゝゝの見ゝゝゝゝゝゝゝゝ

彼玉風をやう〳〵学びなすれるのみ
ならず弱みしか〳〵紅の涙ろとい
ふと云の深もの流を一帥也ちまるる玉集集
みは神の紅涙のゆゑ〳〵いまは神のをれるかとも
ますき事也されと鼻にすもし無事なれ目より
しも事絶〳〵なきまい絶しされと泣をしてなをみ
あるねい悲歌のあるりみ紅涙をはいひ雖又云
さる事なくとも弱みは神をかりうたる云るしに事也
あるへい物をの神を涙見の国ろかやかとさいふこと
一ふしあいその程のれに何れい云涙きてをひをの事
もとすり常形をとさるみ云なるき事を仕りをて
ふる事いるをきし駒い富士といふも云切るれい物焦をて

実みおりて旋みをとしされい拾ひるれの湯にるり実もの
何かるしとれ玉沢みし物をりゆるといふを富士の
煙のゆえさるみゆるみ何事を作し神を涙をより
をり神の海涙の川をして常みを云ありか雄さるの
をは山のゆ山すりるをといひ御ゆるみをの歌をい
はのこるきるみ成ゆりれとりふみてをるへ見かりて
ふみ非に自然一いをて悲い形容をえちをい松てをいるる
ゆを紅涙いを影ひみ非にされい紅涙の歌みを感あるをむ一
ゆるる一詩人の猛みきりるすりるれい也されい紅涙の事い
をるみいへるを事とを涙をり作り又出流し作るい
形りるあやまちを西に へへ
一きぬくいを人今みーのめれはるるとは行いおるまぬ

きるうれしき色いとあけゆくそらは雪
合せて立ち寄る衣を脱こそ見るけふ着るかな花の
あれ　さをとめ　すみの江　いとあたらき弟子の中お
のるきぬ　くるそ　きと有い字侍こそれいおの
きぬくをきるとまていていてていこそ　をるさぬ侍也
されやそれまていへいけ歌とおる一首み歌しはていこ
きぬこそ　とこそ　くへ

法性寺水月か歌に

人とせをて云侍なき事あるこそ云侍なてしなき
事あるいはれ俗云みお侍みいはゝ詞のけい
きるを文に出家とは後の人も詞を考ふこ見他
家を俗云事侍のおのみ歌をやされい知事の人の歌れ

詞のけをあをん事見まる他事俗云とを
言をーきれいやさてを俗云の詞みけるい出事
ますを述く人のきをを色つをきれい也かるみ人の字
ををへい俗云とをもをもを詞の為事麻の
ぶ弱みをへ詞てへ事を今得つる得みてし必奇
こをみかの詞みけの弱ををみえる事みしあること
をいををさみ一詞を今得をい自然の上を得る也
自然い即ち誠實のこと自然の上みの人の事有き
なんやを和き事みを海渡するい自然と見をみて れ
一き事みし知へこをを何んを疑ふてきのはをを
極めくをはき事みけるを也又歌大概の何いめく
言をあをしくといへるを元なのあしに何を詞の旧きを

擇んで言葉新しきを擇んだ詞をもって世言を述べ
のこす狂歌をば問歌のごとくつかさるる事に
なむひとしかりてていとおもしろかれこと

皇太神の御歌

きこえつる歌はいろいろ事えり給ひ給ふきこえたい
やくもみえたるき事やいかみるもきき事みてしいるも
ときき事みてもきこえけ事えたてい御ないとぬ回
事ぬ作るべしなりの御をもてとられ言をいふ事え
ぬとや事なきことやいかるべきこと歌者
歌といふ事とよむといふ事とたくられぬるなれい
それを拾てよん試をるべしいかとふ事を
いかやもむとといふ点とこと云事やされいかるべきを

いかやもそこ事をいひくくれるとしてしかるべ
毎をへいきをの言ぬ私い流きなみてこさるとはよさぬ
りとよりの古云ぬしなきやの能ふい流きなみ事を
一つ世くくりやくよみのるやの詞い天地りぬのしのおの
より化りやしてよりんやいとくやいと世言を析すくくと者
世ぬ事御ていしのるべしいかるべ事言れいこをすぬ今日乃
用後名をいかる化御ぬていかるべ用事い御
くくるべ

たれ所を文とり成れくくいとるより人元要
合点拾とうぬ御を小児ぬ者をすぬやとこをいふ
事のやあぬ人を天下みる
ぬ事いそてけをたそれいかやそなれすのとくり

水月法師の弦歌

調てみることをすまんとて試みの雅一作る歌

景樹

題

墨ちうきに明るきあけぼの

けさの秋さてみけへとそとそええしに下畧

答無歌弦の題いつくみたりや何をあみもとりあつめし弦歌

衣掛也衣ゝ高みに明ること方へうしたり衣の石みたの題をさせ

ありといふ歌に暗くおく常代云流の編をひるまぬ

弦ゝ也えき弦ゝくいつかゆ雅さらに弦也調ること

弦をかくへき歌みあゝ弦えゝ調といふに弦みること

上の事也

四象形状

涼みをと門みもれ月を行や稲葉乃秋のを風

けさ歌ちゝゝく調へみけ一ゝ奇ゝやいとんされと四ゝ

の白いひるゝ江下みの海氏さ海みまゆ

答無歌弦ゝ弦をとい拾ゝ弦ゝ乱ゝ調の人ゝ弦ゝ也ゝ考

まゝ海のさ海ゝて雅をゝ事ゝ合長ゝみゝ弦中

弱い古人のさまみて仕ゝ弦ゝ覚えゝ古学ゝ流

のいひをゝ形ゝ也

張星

友くれくさまつより名のを松つ氏ゝ落き社ゝ行ゝて

けさの姿ゝ下り付れとおの調みき雅ゝ弦ゝ

ゝ

答たるこゝ西行ハ一首ふけひ行こゝ見て言葉
なるゝ汗絞りてハ鄙きみや
早杜田家
さゝみ西さなることゝ絞をこゝ田ゝの里ハ原を行
けふ一首の言葉のあるこゝ況や田家みいゝ行ゝこゝ
答原ゝ行ものあるこゝ
厭ゝもこゝ云へゝされハ絞引こゝ行ゝこゝハゝ又絞
云きこゝるハ徒名を追んゝすゝや何の本引ゝ
徒ゝぬみやこハ作者の言みは定ゝ言葉こゝし
これこゝ公界みゝえ引ハまえぬ歌こゝて可也
けふ西その歌ハ世武人のこゝを作りゝ富好浪華
ゝて言葉ゝ人のこゝ師の詞ゝのむ

こゝ境智冥合(キヤウチメイゴウ)といふ格ゝて歌こゝみゝ詞ゝこゝ
ゝれハ西ゝ景事柄こゝ景のゝみ西ゝ
眼前ゝ見ゝ心ゝ見ゝ詞ゝ
こゝみゝ武人のけかゝの歌ゝていふゝ
ゝ西ゝ言ゝきてゝやゝ解こゝ
いゝみし実情ゝ
ゝ云みゝ何ゝ
西ゝこゝてゝこゝ
ゝみ歌西ゝ大和ゝ景こゝ武御
こゝゝみや作ゝ
答西歌ゝ孔御みゝ
人の何ゝ歌ゝ

よもれ玄刑陰の道也由是をて生れてんかるん世て
生れてそなる曲をなれいてるこのきそつも只事を云
みちなく何の自ひしたりきれたるこの俗人のちみ調
をさまのたるーせを云をおきて歌いつくみりや素
ハ藤原平城天平云古今ハ仏仁より延喜までの手言也
世事ハ〳〵敷学吳見ものも記ーはりいるみんすもや
風俗の自みの試人の言みを見はり手書をもの
中みを云く云ハ人をりれ事情を述るもの也今日の事情
を述るもをりれ云俗ハ別俗也
はもハ歌ハ俗云のこ古の俗云ハ今の古言也今の俗云ハ
世の世の古言也歌みの古云ハ新つくしてもの事みの歌
俗云ハ今つくーて学のみあるに物語をすく味ひ

をくよ色き事のみ俗〳〵色ろ性情を述んとする
中みの何ハ云ものをすも也誠をのきて調をもの歌み
ものをく奥ものーー御歌みの心四俗ーー事のハ
俗云ハ代世みの作りハ也と宣ひ中みからの歌事俗
これハ事云みをく自ひたのきを雅さんや事云みを自ひ
ものきあり古云みの自ひおきあ又調いろーみて
みの自ひをこの自ひあるし自ひをるる事
ものを常也

信濃国浅間人言四言興ろ詠ろみ

社浅水

日みるつる降雨ろれ人ろれ天つおれの源をこれ
日みるつる降雨ろて俗調ハ歌いこをくきをるそけ

きりとていふべきをいふ。（くいとあぬはあしからまと
上京りいふ也ちふ（ますを後くのいふ乞食めいたる
ことろれいかとすることを行（くんとろあいとすれい
ちふ事いとすしすちふ事をいとふとすれそれ和み
ちりめうく進退窮まる事をいひとかんするか
歌の工風とそれをいとふ弱い奇いは放弘みてよきす
也さふいはて奇の甲斐なくやはそれをふい詠り
ちふ事一早ちふ事ふ

祇方神ちふ御ちのなくみ

京調（みのくこれ有事くしき事みてくさへ
ちのくいよ〳〵弱みてはあき調と
ますの強りうんてもなき事都古人はあやまてすれら

弱くしく昔ふ調失されれ行はの御せ乗ちみてはなくはん
ちくく斐雄ふ代上りみ古和ふ斐雄の奇大やく凡調みて
治藤ふこ海りちはくとくすくと有めさふみは
長歌深制ハ昔より弱ふりみさちるみ御ん西き
きぬるの放也さて也弱ハ凡今の世みまも事ふかくき
業みてんそふ浪也歌ハ奈良より以往ふ今〳〵旋奇を
奈良より以往ふ今〳〵旋奇ハ古今を学ふて
ちふ也ちりく〳〵ハ也弱ハ万葉を学ふて
ちんみ万葉ハ時代遠きふ放みは調と調の中み用
拙なくハけふ〳〵ちぬいそれ是て旋奇と古今み学
ちくくハ打まりせ雅き所ありけれハ古今万葉乃
調をよくん得く調和をふハ有〳〵ぬ也これ古今をて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初心の人々もいまだ真の調み為入らず雅談をうかがふ
なりこれ調ふ事なり〳〵江戸風也なと中人しの人世に基根
元をしらずつらつらにみゆるにもをくの長春は
ものの真をもまた未熟なるかの九調を雅調と言得
なるへからず舞風の段は形みは也古今西義も完和
二性をうりやうゝ〳〵世に世に書行四山るあ之歌撰〳〵
大事〳〵個るものとをれをいとりい彼穂陽をの熟覧
をもかりて真初れてをこれやこれは事みやはてもおのれさ乃事
乃ものあ〳〵彼陽の事とりいをくかをの事みの主へて
己の歌をしるすい大乃也せといとも歌みは乃解しをさ者
ひるをみ豪末を角ひくく雅俗鶴陽とをるる調のみ法
みりへい系物を弃くく心ををくかみて古みるるみ調を

味ひをふへしをを家みを孫るもの〳〵さをんも出く世婆みの
なくをみんいうりみをいい得るをきる〳〵るりきし〳〵武人中
伝るし

信濃の内山寺の人に

他分田舎漢の目を驚ふ歌の拙み詠出俗行の完分一にあて
家〳〵有や否歌をまた切みの世いあるの田舎も歌やうに家
行の事家巨〳〵る人の通病みい幸文をそしあちりる
れ世習癖也亜ものの猫歩いはけあて気なのきるなのをとく
乃ちなきれみるををうみよみりて行らへい弟人とりみいの
まみや感歌の時事をる事ふくれくあやまちもへうた
世の教示をを攜集て作て也表衆すをををいなるく
面白きやみの三生下畧

東塢大人文化十三年 桜寿の賀の花うんとてはうてゝ下さるゝを行ゆく 三元らの歌

花ぶゝつゝもゝいつて郭人のすゝ郭と今ゝ郭ん

たかまつ乃下ゝへみなて大人のに信者

大人江戸の形形すり 巴山紀成 栗田一〇

月白富の郭ゝ迎ゝ郭ゝ道みてゝある分

ちかゝて

形ゝゝ花の雪てゝゝめれとあきやゝ一つん 桜きこの花

口郭大人の口信あり

文政六未年 江戸人 高雅

萩映水

おそゝつゝさゝりとこゝゆ萩萩 たゝ行水し松ゝり 信好

さゝゝ花散ゝゝゝれ川も萩のみきの浪ゝ立ゝる

ゝ 郭の浪いゝゝみ郭信ゝり

河ゝゝゝゝゝさゝゝ萩水きゝみ芋ゝゝを芋ゝ萩はゝれ

ゝゝゝゝゝ

秋ちるの色のうすきをも紅葉とうこと

歌初め同　きまり　たていなく常し

枝をうち散　きりとうゆる秋の花紀盛

多酒　こ　きき下葉の家　さやかにうつる秋の花

ききの伺家　みえて下葉の中　たたえ

紅葉

世河のきに　すと　秋　あるきみゆる　浪の上の花

たか

水の上　散　うつ　ゆ　ゆ　根の秋のうつ　きり

同

移れとも色うつらぬ秋の水の底を深　秋の春

おもきうと

多度　ちり　紅葉とつむ　紅葉　山の秋

玉藻とつむ　紅葉　きり

秋萩のさかりをこれ　うつ　紅葉　うつ　ふ　後　きる

紅葉の色　みわ　ちゆ　みや

手ふれ　萩の初　咲　新　山の水　紅

手つけの色本を　て水の　ぬ　れ　吳

やう　みや

秋萩の花のうつ　みれ　度の半　水　みむ

きこ　へ

深り　の　水　移　り　秋萩の花

初二の　ぬ　ます　や

水の面　紅葉の色　咲　玉川　のと

さほりの玉川の清きをたゝえ侍るすや
萩のむらつゝ花のの続みは秋つさふ海のうきをゝ
おもむきを海のそきめんにや

岡船灯

灯の色をかのうみにゆるれむらもの名みを詠る作るん
きこをへ

新光はるあるの灯えくみんの細くものをこそ人應專
文あるしかるる家のとすいるの乃ゆりみる世世の房婆雄
幸山のまつぬこのうれをいかみ世とをを詠るん
あまりをくや侍るん
灯を尾花の末ゆ乱るる人の作出みん
尾花ゆ見あめとも見えに

風をはかりの実おつ考みのをまつ博き燈火乃色
上下離をくきこゆる
あつれるくや作んるる乱ハ久をかのうみ拾る灯
乱て社人作ハしきれるこゆ家の
灯火
野をは山をるる出るる作みゆるるの火歸
海ぬるるを深きておきます 狩月行ゆやの月火
現小ゆへ
作人も只ををるる家みの博き灯の乱
乱るつふぬます作や古みる
乱火をかきて友とおりの乱月やれるを数多の房
数多を蓋源みや作るん

此みもえうる氣八重菊てるほうの燈火のを
花の多とまるを天の物燈火の樹き菊を乃奥
なてこれ小世奥に若名仏あるる竹のうを
こそきこゆ
出る日仏花として竹をかくことをいはんやする
なり
あをれかるすうる如に陰深き菊の奥に火のうを
ほしく
燈火すう多出れんきよこい世の如仏花をきり
しらておすきまきこやひていかえ仏れてこと
日のなきこうう稀なり
思なのけきうる如若濃の仏くう移う家の音火

上下かをかをる
すもの人のえく
仏人の心ある
燈のおと
初二ヶ月
こそ七夕えの柴の戸丑時しき竹のうを
こそ七夕をまてかるの切こいう海き夜仏花ぶ
きこ四つ
第樹

奨確 一点 良徳 好普 泰仕 澄守 正俊
孝教 高節 常足 一点 政有 亟夫 奥人
信好 一点 紀成 一点 紀言 玉彰 蹄圓 一点 廣九
登岐 應專 一点 應現

稲村三羽鴉の中大人雅俊卿一分

若菜

春の野の若菜摘てや歩るく借ゆ之者一つ

さもくみてもの湖らくも

松月

おのつくる枝さかえし山松のあのうをひろく松のよの月

おのつくるいろ

行潮月

立ぬるは月の月ゆ月は松より上ゆ家みはる乳

一おのつくるの乙云みてるきゆ也

湖上月

さ波やさ野代ゆ和田ゆ月なく又ゆ隠るとてゆ月ゆ

河りゆく大和田代ゆんゆん何ゆもゆ

里月

山の陽代松代月ゆとるれきゆん所乳部ゆのてゆ乃里

小野系ゆかゆ乳きゆきの所るゆ

月出山

山の陽を離ゆ果ゆゆゆ乳あてゆりゆる松のよ月

あとより出る月代

山月入扇

松のかゆを玉ゆれゆゆゆ柳ゆ来て白ひ初める山の陽乃月

葛陽の家ゆ二ゆみゆつ松のえ乳の伊高

又南ゆ行ゆ乳る

蒼風月

[illegible]はまのうらのきさ（荒磯海）
月のなをしあれもたいらかなみや和二の第ひと伊つ
[illegible]
雨中旅
[illegible]雨ゆ白露おきて朱果みきり
[illegible]と言ゆ赤白あひて[illegible]
四時書
小山田の[illegible]
[illegible]
紅葉成
[illegible]
[illegible]

[illegible]
いつのうめ時[illegible]
[illegible]
[illegible]
枕下夢
[illegible]
[illegible]
杜鵑故
[illegible]
[illegible]
[illegible]
俗家
[illegible]

朝ゐく四方の嵐も隔てて信とるらし高砂の尾の
雪の面のみつもるとは高砂の峯の雪
山家雪
柴ふ[ち]る山さとを雪あらをてし冬の柴く
おもるの花の雪別れん
春雨
梅の枝ゆ[ー]たをる春雨の雫を形の袖とるらん
ちるを惜る口調ちるらるる
初夏郭公
初夏の郭公郭公鳴くさとの知音聞るん
夏の花の袖を雪の
夏草の紅葉拾ふ所

紅葉伐拾ふ[ー]さらく[ー]おめるる神の見た林の風
さらくの詞をみよるん
山家述懷
山さとを山さと[ざか]の[ー]世をあて遊ぬものをうるこきり
世の[ー]とうく[ー]夏こそ[ー]ちるく[ー]と郭くこい
あ[ー]きこ古[ー]ゆ[ー]し[ー]の[ー]すのこ[ー]ハ[ー]の苔
み水をそ[ー]くらゆ[ー]と[ー]ゆ[ー]ゆ[ー]
うきこ樹

明治文庫